

目的 分散染料の欠点は水洗堅ろう度が優れず、昇華や有機溶剤に弱いことである。逆に、反応染料は水洗堅ろう度が優れている。そこで反応型の分散染料を用いればよいのではないかと考えられる。そこで本報では新しい分散型反応染料を合成し、これらの絹に対する染色性を調べた結果について報告する。

方法 用いた分散型反応染料は、ビニルスルホン型(A)、モノクロルトリアジン型(B)、ジクロルトリアジン型(C)でこれらの化学構造を表1に示した。絹布はノイゲンHC(18/2)で洗浄したものをを用いた。染色(絹布0.2g, 染料濃度 $1\sim 70 \times 10^{-5} \text{ mol/l}$, pH2~10, 浴比1:1000 時間0.5~4hr.)後、抽出剤によって未反応染料を除去し、さらに染色布を溶解剤中で加熱溶解した後、溶液を比色し、固着染料量を求めた。

結果 染料AとBについては、高温ほど、また、染色時間を長くするほど、固着量が多かった。これらの染料の固着量は同一染料濃度で染色した場合、一般的な分散染料の染色

量よりかなり多い。しかしながら、染料Cの固着量は非常に少ない。なお、染料Bの場合、染浴に非イオン界面活性剤を加えても固着量には殆ど変化がなかった。

Table.1 Dyes used	
Dye	Chemical Structure
A	
B	
C	

△: トリアジン核

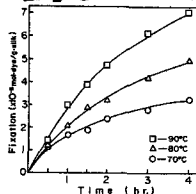


Fig. 1 Fixation of Dye A for silk (pH8, 1hr)

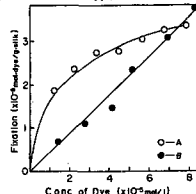


Fig. 2 Fixation of Dye A and B for silk (pH6, 90°C, 1hr)